

## 薩南の友に

生

(峠の茶屋を立ち出でし旅人の心持)

大分世間がしめやかになつて來た、託麻の方の斷岡をぶらついて見ると最う彼岸花は大抵瘦れて僕の好きな犬蓼の花が淋しく赤く咲いてる、上口時代の事やなんかひどく思ふ。此の間の曠原の葉書は見て呉れたかあれにかき洩らした分を一寸。

「希くは吾に與へよ生命ある赤き微なホルカノの君、水澤に白き花咲く春を思ひ外輪山の原頭に立つ、君は笑みつ阿蘇は女性の襟に似て南の土に住き花を見すと。」

之は山に行つた時あの柔らかな曲線美を見て口ずさんで見たのだ、詩人ならぬ人の歌と思つて見て呉れ給へどうも想像の裡にあつた阿蘇と現實の阿蘇とはひどく違つてゐた、あれには山と言ふヒーリングは全然ない急斜の緩い高原帯の凸凹を上下してると最う頂邊に出てしまふのだそれだけに又吾々の様なせうつこしい工國の海岸に育つたものには高原と言ふものがしみじみ味つて見られた、それはあの君の處に送つた處から山の谷を栃木に落ちる、なだらかな野路を行くと佳ひ外輪山の美しい色彩に酔ひつゝ虫のさやかな音の連つた山裾の衰頹した緑色を分けて行くど何となく氣が浩々として、そうしてほのかな悲に堪なくなる、其の時「やはり自分は歸つて行かねばならないのだ」と言ふ塵界に生れた情さがひどく思はるゝ。昨夜は又豫習を投げ出して大和座の南部太夫を聞きに誘はれた。(餘裕があると言ふ譯でないけれど)なんどか言つて八人の色々な顔をした男藝人に咽自慢を見せつけられたがやつ張南部太夫にはやられた、太閤記の尼々崎と

言へばあゝあれかと早合点するのが常だがさあ初まつて見るとそうは行かない。糸の響が夢の様になつた舞台には幻影が動く、若い二人の男女は夢の喫も浅いのに早々引き千切られて男盛りの花の鎧姿を血なまざり修羅に追ひ出されて行く、夕顔棚の後から出て來た世にも稀な奸雄は實際親身の母をさし通す、出てつた悴は痛手を負つて歸つて來る。祖母の屍や父の姿や可愛い妻の顔は末期の眸に入れる事も出來ず「あ最う眼が見えん」と言つて逝くではないか因果と言つたらそれまでだ、世が世だからと言へば一日の辨解出來ないが今の自分には妙に悲しくなつて未練の涙が連續して出た。父は狂して今朝鮮の奥に押し込められ居る……」と言つて聞くに堪へん君の身の上話を悲んだ上句獨歩の運命をいじりながら「……因だろ、因果と言へば僕は前世で何の罪業をしたのだろうか？……」と他愛もなく泣きながら運命だ歩の運命だそれになりとして諦めねば致方がないと嘆息してゐた君の顔が突然浮び出た、光秀を悲しむか君を泣きに來たのか分らなかつた、光秀は斯んな悲しい事實を目の前に見て尙ほ何等かの満足に笑ひつ死んだが如何かそれは知らないけれど、後は最うごた／＼な感情に攻められて外のは聞かなかつた。君の身の上や、色々迷つてゐる思想の糸を繰り返して考る、又か君は思ふかも知れないがデカトが言ふ様に吾が思故に吾存すで致度がない持つて生れた性分だからなあ。論は漠然として出發するよ迷る過去より迷へる現代を経て空々漠々の中に消るかも知れないが今の處覺悟の前だ。疲れた人が峠の掛茶に休んで再び出發する心持ちの人の叫と思つて讀んで呉れ給へ。此の頃の僕の考が多少でも君に知せたいだから――

竊かに思に。第一長からぬ人の生命だ、百歳にはとても満てない人の壽命だ、偽善の皮を被る必要もない。

れば理屈を捻る必要もない、運命も因果も全く言はなくとも佳むではないか。自己存在の意識吾々の出發すべきポイントとは之からだ。朝に死し夕に生るゝ習只水の泡にぞ似たりける、しらず生れ死ぬる人何方よりて何方へか去る又知らず假の宿誰が爲めにか心をなやまし何に依りてか眼を悦しむる……此の間だ……消え雖も夕をまつことなしと行く水の流に妨子は悲觀しつゝ書いて行く。實際の處が靜かに考へて見ると……の間の自己保存が人生々存の第一義ではあるまいかと思ふ、大原則は此の規道を離れて何處に昭々乎たる實が求められよう、君が悲しむ点は自己以前のあるものを悲しむであるに過ぎん。僕等の生意氣にも思想を言ふものに入つて見た時、煤けた天井から切れ／＼こぶら下つて居る蜘蛛の糸見たいに暗い部屋の下をち／＼歩いてゐる自分等には斯んな煩累がどれだけ若い心を大人染ましたか知りやしない。ごつ／＼と角にり道を迷つて迷つた上旬の果てに眼を開いて見るとさすがに變つて居る現在の自分は最とても不怖不感の仰を抱いて行く事は出來ん鵬鰲を提げて針の目を行くよりも六ヶ敷しい、村寺の梵音を聞くと杯盤狼籍のり乱した座敷を聯想する、薄暮カーテンを搖つて出づる聲美しい教會は青春男女の密會處としか見ねなくつて來た、少なくともそれが淡い事實は事實であるから、實に美しいものは宗教家の華やかな形式である装である、カールオールは言ふ。……Which is often only a profession and assertion from the outworks of a man, from the mere argumentative region of him, it even so deep as that, But the thing man does practical believe is often enough without assessing it even, much less to others—Hero worship—それが信疑い自分はないが、唯自分は自分の青二才の故に之等に權威を求める事の出來んのが悲しいのだ。世上の道學先生なるものが又それだ俗輩、凡人、俗人と可愛そくな人間は彼等の呼捨てになつてゐるが當人にも余り上等の

間である事は見えない。彼等の説く人生觀は何を前提として發足し、何處かに去つて證據を求めてゐるが、彼等は人と動物との差違に就て如何なる科學的見解を下し、虚懐淡乎として其の價值を論じ、目的を求めて而かも宇宙との關係を冷靜に考へて居るか、人生が夢幻的でない以上最少し信實に科學的に行つて呉ねば部下は困るではないか（人生のリーダーと高く止る量見など）少なくとも彼等の見る人間と實在の人間は、大分違ふ。彼等の態度は思想的誇大的偏見のと見なければ符合しない。然らずんば偽善をよそはう。彼等の言、俗人よりもつまらん尊嚴を表する事の出來んのは明白であると僕は思ふ。言ひ度ないが又世上に哲學者なものと生存して居る事だ。六疊の天地が彼等の空氣をしてゐる處だ。彼等の天職は實社會の根底より論破すにあらずして葬り去られた遠い過去の沈腐な哲學史に齷齪して操り返し／＼てゐるに過ぎん。彼等の目には、時代の色彩が全然映らん。考へて見ると青年は迷ふ。迷ふのが當り前だ。最う自己を頼るより外には致がない。自己以外に何物をも發見しない事になる。本性に率つて追欲する處に行かん事を希ふ人間快樂の追は、人生道德の源泉ではあるまいか、少なくとも出發せざるべからざる最大要素ではなかるまいかとなる。本のナイルが流れてネヒンクスガ暫らくして立つ。李白は酒を把つて月に歌つて曰く『青天有月來幾時、今停杯一回先——唯願當歌對酒時、月光長照金樽裏』。蘆花はどう言ふ氣で田を鋤き出したか、それは知らない。唯斯くの如くにして私は新らしく出發する、然かも尙迷ひつゝ新なる開拓者と大努力（善良の意味）を待つゝ茫漠たる曠原の中を死ぬまで行かねばなるまいと思ふ。

自己生活の豊富、之が僕の主張の意義に多大の關係があるのだ、僕は現今唯今の僕を考へる、そうして、是は獨行、利己の満足から生に對する淋味を癡析する様に勉める。誰しも高利貸でない以上有り余る黄へ

を積んで見す／＼置死するものは一人もあるまい急ぐ道だ、近道があれば無理に廻り路はしない——汝は汝自身の怠け足のまわりに毛布を引き廻し柔らかなる帽を戴きて隅々の方に安樂に氣車で行けるのに辛苦的努力を敢てしてバイシクルヤカーノで精神的に何故行くのか。ハマー・トン——と全じ氣持ちな事を一世紀も前に西洋人は平氣で言つてゐるが其處だ一面のポイントは自己を豊富にするにあるのだ。斯く言ふと燒糞になつて、いら／＼したイゴイストの様に君は思ふかも知れんか少し聞て呉れ活しを聞いたらまさか石を上げて僕を打ち爲まい。短氣な宗教家の常例の如く一片の絶交狀と共に百年の友誼を破壊する人でもあるまい。私は自己意識の階段に昇りつゝ我とは何ぞやのサブゼクトに觸れつゝある經驗連續の「クレイトン」であるから——人生を一の泡沫的個人の一生と斷言するのではない、近く現るゝ新道德のピクチンたる事は無上の光榮としちよる、吾々の悲しき經驗も一つの要素だからなあ、橋上に立つて徂練する人間を見よ、美人がゼントルマンに助けられつゝ行く、シェークスピアか詩集を抱へて通る學者や乞食カーペンター天才馬鹿凡人百姓が個々のヒューマニターを抱いて急いで行く、而かも異つた目的を以つて、然し僕は何となく其の間に連鎖があつて自分も其の分子であると言ふ事は忘れない、忘念強い吾々凡人のそれもバトモスの荒磯に續き倒れた苦悶も等しく全じからだそれで心持ちは解らう——然しながら今まで連續して人から教へられた美しい宗教や道德上の形式的眞理には甘じて壓迫しられない此の身のあらんかぎりそれ等の刀斧を一打とても加ふる事を許さんと言ふのだ(尤も廣き意味で重箱の底を箸でせよる様にせまく言はんのだ)之を遠くの場處から見ると平衡的に行くべき現實の世相と没交渉だからだ、又此の世に絶對に服従すべき眞理があるとしてそれにもそれに反抗して馬鹿を見る、そんな輕卒な意見じゃない。僕は胸中の羅針盤に依つてコースを求めて行く。行つ

まつて居るから。親潮と暖潮が衝突して一つは海底深く沈み、一つは漂々乎として東を洗ひ北米の糲糊に流れ去るそんなものだとかきらめてた。大分何を言ふのか解らなくなつたが底深く流るゝ暗潮は一定の方向にある、表面の小波の如く煮わ切らぬ矛盾や悲哀が搖れるゝ、そこは弱い人間の致度のない處だ。と諦め給へま。富君!!。

何日だつたかブツクメーカーで有名な某氏の修養録と言ふものを讀んで見た。一向刺戟がない、何故であるかわ自分が行く中に明瞭に認められた實際あんな事で世が修まつて行くものなら誰しも高い月謝を拂つて難義を見ようとは思はん途々半分處で古本屋に叩き賣つて東京庵裡大精力の材料としてしまつたが何時の世でも理屈と實行とは分れて行くものだところゝ思つた。

要するに今からこせついちや駄目だ、修養の時代は或る意味の利己主義時代だ、出来るまでの蕪大根の生涯だ、其の後は美しき妻君の厨の犠牲にもなり、熊公方にも行き、宗教家の處、畫伯の勝手よりも竊に入るなる丈け面白く愉快に行く、今から道德々々と言つたつて若い心は失せて終ふからな勉強はするさ、死病もついて珠數はつまぐる、單調な音樂を聞いた時と複雑な調和した音樂を耳にした時と味はごちらにあるわかる。(ひとしく音樂の目的は達してゐるが)ま一つ言ふ事がある君はソロモンの居た時代とデモステネスの死んだ時代と何時頃か知つて居るか。(ぼんやりした時代でも佳い)辱しいが僕は全く知らん僕に言せるさ下度其の頃支那では項羽が涯下の十戰に敗れてゐるマセドンの暴君が桓河の畔に馬を立てゝ居た時代だと言ふかも知れん、ソロモンがゐたとしてゐないとして何の痛痒もない名を竹帛に垂れ芳名を千歳に残す事の無意義さよ、カトリルの有名な詩に神曲がありベルナルドダヴンチてう雄辯家が歴史に居ては大變だ彼等は浮ぶ瀬は

無からう。小學では笑もせず、中學の幸福を思つて辛抱し、中學は大學、大學は社會と冷酷なアングルにぶつゝ、衝りつゝ漸く生きのびて死んで見ろ、生存に何等の意義があるか、そう言ふ人の死態をかつて見たことがある淋しがつて何んとも言へん殘酷な目に遇ひつゝ逝つてしまつたが僕の主張の意義はほんやりでも解さう。ハートトンが言ふ通りだ。角く行けば兎角く仕損じる、常に思ふが孟子も今少し折れて役にぎもつければよかつたに、つまらん利屈を言つて不平の中に死んでしまつたものだ。死後の名譽があつたにしろ物質の散した時、何の權威があるかい理屈ばかり言ふものは損だ。死態が悪い。木下尚江なんかつまらん主義にかぶれずに辯護士なりとして着實に行けば佳い、現代は此のコースを取つてゐる、南風が吹いても龍卷が起つても、ちやんと仕度がしてある、變化が發達を意味すれば又どうかならう、それは未知數だ。少なくとも自分は健全に行く、行きつゝある、そして自己を欺ては居ないつもりだ。危険なる思想と云へばをれまでた、君を慰める意味で費した三時間のタイムと煩勞が没却するのみだ、男らしく、愉快に、豊富に生活せよ。要は之だ總ての生の豪快なる味は野中の泉の如く浚々と湧き来る、然して總ての支流を自己の領として蘇漫のオーシヨンに行かう。李白が把酒對月の快は自ら来る。自分の議論は茲に終る。明瞭に言はれんから今度遇つて話そうよ——左様なら。

虫をきゝて、寂しき夜を感想のビシヨンに君の顔をつくり見る

(四三、九、三〇、夜半)

琪樹西風枕簟秋、楚雲湘水憶同遊、

高歌一曲掩明鏡、昨日少年今白頭、(許渾)